

科目区分：大学院：学校臨床心理専攻，授業科目名：臨床心理面接特論1（履修生3名）

担当教員：信原孝司

自立的・自発的な臨床実践を目指す授業実践

教育実践総合センター・信原孝司

1. 授業の概要

本授業では、地域貢献に役立つ臨床心理士の養成を意識して、臨床心理面接の専門性について、特に精神分析的心理療法の側面から学び、理解を深めることを目的としている。また授業の到達目標としては、心理臨床の専門性に関する知識の習得と、今後の実習における心理臨床実践に備えることである。この科目は、臨床心理士を目指す大学院学生（学校臨床心理専攻臨床心理学コース）の必修科目であり、全ての履修生は臨床心理士資格取得を目指している。

授業では、初回に授業内容と進行予定をシラバスに沿って提示している。これは、履修生が前期の見通しを持って予習に取り組み、関連した項目の復習に取り掛かりやすくなることを意図したものである（以下は今年度の講義内容）。

- (1) オリエンテーション：心理療法はなぜ効くのか
- (2) 精神分析について
- (3) 臨床心理面接での問題理解と面接構造
- (4) (3)の続き，臨床心理面接における技法
- (5) (4)の続き
- (6) 映画を通して臨床心理面接を考える1
- (7) ディスカッション
- (8) 心理療法の初期面接
- (9) 心理療法の基本技法 - 質問・明確化・直面化・解釈 -
- (10) 面接中期 - 転移・逆転移
- (11) 面接終期 - 抵抗・気付き・ワーキングスルー
- (12) 映画を通して臨床心理面接を考える2
- (13) ディスカッション
- (14) 心理臨床トピックス
- (15) 前期振り返り・レポート提出

2. アンケート結果

以下、履修生提出のレポート中の授業評価を中心に振り返る。コメントでは、授業内容や授業方法については支持的な評価が多かった。また、臨床実践を考える映画の視聴とディスカッションの構成は支持が多かったため、今後もこの授業形態を継続したい。

以前の講義では質疑やディスカッションの方法や時間配分に課題があったので、小グループによる短時間のディスカッション形式を意識的に取り入れたが、講義内容によっては時間配分が難しい時もあり、全体を見通した柔軟な授業運営が今後の課題として残った。

3. 学生の自立的・自発的思考の育みを意図

授業では、履修生の自立的・自発的思考を育むように意図して、担当者と履修生とのやり取りが双方向となるように留意した。具体的には、授業のテーマの区切り毎に質問時間を設け、質問に担当者が全て答えてしまうのではなく、ディスカッションを促し、曖昧な部分にはヒントを与えて自分達で考えるように配慮した。

4. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

心理臨床実践の対象者であるクライアントは主に県内の住民であり、地域の特殊性を感じられる相談内容も多くある（例えば地域の伝統産業に関する家族・個人の悩み等）。履修生には県内出身者が多いが、他県出身者もあり、また年齢構成も多様であるため、お互いの意見や情報を持ち寄ることで、議論が活性化し、教育と研究のつながりを感じられる機会が度々あった。

5. 総括

授業では、履修生の自立的発言を促す中で、履修生に考える時間を与えたり、ヒントを与えてディスカッションを促したりして、時間が掛かる場合もあった（そのために授業予定の柔軟な組み立てが必要であった）。課題として、ディスカッションから派生するテーマを次回授業で取り上げることが出来れば、より深い理解に繋がった可能性があった。この可能性を実現するためには、授業で取り上げる内容をもう少し精選することで、授業でのディスカッションで派生したテーマをより発展的に取り上げたり、履修生にそのテーマを予習させることで、より理解を深めることが出来たかも知れない。ただ、授業ではどうしても取り上げる必要がある内容もあり、全体を見通して優先順位を見直して修正しながらの授業運営が必要になると思われる。